刊行に寄せて

宇都宮大学国際学部長　佐々木一隆

宇都宮大学HANDS事業が10年を迎えられたことに対して、国際学部長として心よりお慶びとお祝いの意を表したい。以下では、HANDSが国際学部、附属多文化公共圏センター、私自身の教育研究や社会貢献とどのように関わってきたかを述べることにする。

HANDSは2010年度に文部科学省特別経費プロジェクト「外国人児童生徒教育支援事業」として発足し、2016年度より学部附属多文化公共圏センターが引継ぎ、現在多角的な事業を展開している。こうしたHANDSの歴史の中で、国際学部は2017年度に従来の国際社会と国際文化の2学科体制から、社会科学と人文諸学を連携・融合させて国際学科1学科に再編統合する改組を行った。多文化共生の実現に向けた21世紀型グローバル人材の育成をめざし、多文化共生に関する体系的なカリキュラムを提供することになった。そこには国際性と学際性があり、多様性も顕著に見られ、本学部は学生と教員の構成上、多文化共生社会の縮図といえる存在である。2019年度には国際学科長が多文化公共圏センター長を兼任することになり、学部とセンターはより有機的に運営できる組織体制を整えた。

国際学部は多文化共生に関する学際的な専門教育を大きな柱としており、それを支えるものとして、コミュニケーション能力を高め国内外での行動力を養う「国際キャリア教育科目」と「英語+1言語」を必修とする「専門外国語教育科目」を整備した。このうち国際キャリア教育科目群に属するものとして改組により2018年度に新規開講された「グローカル・イシュー研究演習Ⅰ, Ⅱ」がある。これら2科目は、従前からの講義科目「グローバル化と外国人児童生徒教育」とともに、地域のグローバル化（すなわち、グローカル化）に関わる科目であり、県内に在住する外国人児童生徒に対して、異分野連携の複数教員の協働の下、フィールドワーク体験型および学生主体の企画・運営を重視する科目として、学生への実践的な学びの場を提供してグローバル化する地域の課題に向き合っている。具体的には、上記科目の受講者は、宇都宮市での「子ども国際理解サマースクール」、真岡市AMAUTAへの「学習支援」、栃木市や本学で行われた「多言語による高校進学ガイダンス」、外国人児童生徒をめぐる状況把握を目的とした県内の聞き取り調査など、HANDS事業の様々な活動に参加した。2018年度～19年度合わせて200名を超える履修学生が全員参加したことになる。このようにHANDS事業には、附属多文化公共圏センターを介して学部と地域をつなぐ側面がある。

次に、国際学部における組織的・学際的な分野融合研究とHANDSとの関係についての話題に移ることにする。HANDSについて語る際には、連続採択された2つの科学研究費(A)（いずれも研究代表者　田巻松雄 国際学部教授）のことを抜きに語ることはできない。2014～18年度の「将来の『下層』か『グローバル人材』か―外国人児童生徒の進路保障実現を目指して―」および2019～23年度の「外国人生徒の学びの場に関する研究 － 特別定員枠校と定時制・通信制高校の全国調査」である。後者の科研(A)では初年度の2019年6月に、2019度新規採択されたことを受け本学で「多様な学びの場」に関する共同研究のキックオフシンポジウムを開催した。本シンポジウムには、本学部外国人生徒入試入学者も登壇した。本学部における教育研究の成果が地域貢献・社会貢献にもつながった、一つの象徴的な出来事である。

ところで、私は学生時代より英語に見られる文の抽象的な構造について研究して現在に至っている。そうした中で、25年あまり前に国際学部の教員になってからは周囲の教員や学生からの影響を受けて研究と教育の幅を広げることになった。母語の日本語や外国人にとっての第二言語としての日本語の重要性を強く認識するようになり、比較の視点が生まれ、言語の構造のみならず実際の言語運用にも関心を持つようになったからである。多国籍で多言語多文化環境に身をおき私自身が確実に変容したのである。例えば、タン・ティ・ミ・ビン氏の博士論文指導を通じて、日本においてマイノリティ言語であるベトナム語を母語・継承後としてどのように保持・発展させることができるかという課題を家庭・学校・地域の連携に求め、マジョリティ言語である日本語といかに両立させてバイリンガルを育てるかという課題を認識するようになった。また、社会教育委員の会議に出席すると、宇都宮市にも外国人児童生徒が日本語の障壁に悩んでいることを窺い知ることもできた。私自身の教育研究や社会貢献活動についてもHANDSの事業がとても身近で重要であることを実感するのである。

HANDSのさらなる発展を祈念したい。

はじめに

令和元年度多文化公共圏センター長　倪 永茂

HANDS（外国人児童生徒教育支援事業）10年史の作成にあたり、ちょうどその年度に多文化公共圏センター（以下センター）長を務めていたことから、センターにとってのHANDSがもつ意義と成してきた貢献を振り返りつつ、これからのHANDSに対する期待を記す。

センターは平成20年4月に発足し、今年度で13年目を迎えた。設立当初から、地域社会が抱える多文化共生に関する課題について、自治体・市民社会と協力してその解決に貢献していくことを目的にしてきた。それはHANDSの理念と実践に一致するもので、HANDSの活動が地域社会の抱える外国人児童生徒教育というより具体的な課題を解決しようとするからである。

平成28年になると、それまで文部科学省特別経費プロジェクトとして展開してきたHANDSがセンターの一事業になり、センターとの結びつきがより密な関係に変わり、HANDSが発行してきたニュースレター『HANDS next』がセンター年報にも掲載することになった。

田巻先生をはじめ、多くの方々の知恵と努力によって、センターの各種事業のうち、HANDSはその階層的・多角的活動がとくにユニークである。県教育委員会と県内9市1町の教育委員会並びに小中学校の代表校長が参加する「外国人児童生徒教育推進協議会」は、地域教育のトップとの連携、または全県的な視点でHANDS活動を指導・サポートしている。個々の学校にいる外国人児童生徒に対して、支援の要請をうけて派遣している学生ボランティアは、多文化共生の実践を通してより身近なところに問題意識を持ち、グローバル人材に成長する行動力を学生に提供している。また、夏休みになると、母国語保持教室として外国人児童生徒の集団学習を支援する活動を大学生に参加していただいている。この集団支援活動は短期間で地域のグローバル化を体験する場として多くの学生に珍重されている。そのほかに、外国人児童生徒の進路を把握するために県内全域を対象にした「外国人生徒進路調査」、高校への進学を助言するための「多言語による高校進学ガイダンス」、教育に関する悩み何でも相談「外国人教育相談」、大学への進学を可能にした「外国人生徒入試」を国立大学ではじめて実施したこと等により、外国人児童生徒に対して一貫した進路支援を制度の面で保障した点は各方面から高く評価されている。さらに、タイ語、スペイン語、ポルトガル語、フィリピノ語、中国語、ベトナム語で刊行されている中学教科単語帳の無料配布や、外国人児童生徒およびその保護者とのコミュニケーションをサポートする多言語翻訳システムの開発・整備等もHANDS活動の成果である。毎年、このような多彩な活動を展開するには、情熱・行動力・忍耐力だけでなく、つねに外国人児童生徒の身になってそのNextを先取りする、いわば、先見の眼がないとここまで成功しない活動だと思われます。

地域との連携をアピールすることを目的とした、昨年度開催した第1回宇都宮大学コラボレーション・フェアでは、センターとして、各種事業活動を地域の方々に紹介した。紹介用ポスター2枚のうち、1枚はHANDSに関するものであった。そのことからも、HANDSの貢献の大きさを窺い知ることができる。

外国人児童生徒は当初、両親に連れられて数年間日本に身を寄せ、その後帰国する状況から、日本社会での滞在の長期化や定住化が進み、日本社会の一員となって、少子高齢化社会を支える担い手と期待されるようになった。文部科学省がその現状に合わせ、外国人児童生徒受け入れの手引きを作成したり、外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議を開いたりしている。こういった文部科学省の施策変化は外国人児童生徒教育が一過性のものではなく、外国人労働者を受け入れるための国の長期ビジョンに沿ったものであることはいうまでもない。

今回の新型コロナウイルスの感染拡大において、多くの学校が長い臨時休業に追い込まれ、外国人児童生徒がより厳しい教育環境に置かれるようになった。対面授業に参加できないだけでなく、日本語教室活動の休止も各地から伝えられている。コロナ禍を機に学び場を失うことのないよう、ひとりひとりに対するサポートがより必要になっている。Withコロナ/Afterコロナ時代において、外国人児童生徒教育に関わる新しい課題に挑戦し、HANDS活動のさらなる飛躍に期待する。

もうひとつ期待することはHANDS活動の広がりである。外国人児童生徒教育問題の解決はまだ手探り状態にある地域が多く、専門家の指導の下組織的に取り組む学校はまだ少ない。草の根的な活動によって、HANDS活動を広げ、より多くの若者に参加していただくことが、身近な多文化共生のあり方を考えるきっかけともなろう。

最後に、HANDSの10年をサポートしてくださった関係者の皆様に深く感謝すると同時に、引き続きご支援・ご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。